

メータオ・クリニック支援の会（JAM） 会報メール 第102号

[2018年1月号]

NPO法人メータオ・クリニック支援の会（JAM）支援者の皆様

いつもご支援していただき、誠にありがとうございます。
JAM 会報メール第102号をお送りします。

JAM は2008年3月に発足されたNGOです。ビルマ／ミャンマーからタイへ貧困や戦火を逃れてきた人々の病院、メータオ・クリニックの活動を支援する目的で設立されました。

支援者の皆様へ JAM の最新の活動をほぼ毎月中～下旬ごろ会報メールにて発信いたします。
今後ともどうぞよろしくお願いたします。

<目次> [ページ]

メソトマンスリー

国内から

国際保健医療協力のなかで (39)

編集後記

次号の予定





賛助会員の皆様へ 会員更新のお願い

平素よりメータオ・クリニック支援の会（JAM）の活動に深いご理解とご支援を賜り、厚く御礼申し上げます。再三のお願いで恐縮ですが、賛助会員の更新手続きがまだお済みでない皆様へ更新のご案内をさせていただきます。すでにご更新くださいました皆様におかれましては、誠にありがとうございます。

継続的にご支援くださいます皆様のおかげで JAM はこれまで活動を続けることができました。今後も多くの皆様に引き続きご支援を賜りたく、ご賛同いただける方は下記の要領にて会員更新の手続きを宜しくお願いいたします。

更新の対象となる皆様には、昨年末に JAM オリジナルカレンダーと共にご案内の文書を郵送させていただいております。ご不明な点は、事務局（support@japanmaetao.org）までお問い合わせください。

更新の対象となる方：平成28年7月～平成29年6月までに入会および更新いただいた皆様
会員期間は平成29年12月末をもちまして終了となります。
更新いただける場合は、お手数ですが平成30年1月末までに手続きをお願いいたします。
更新後の会員期間は平成30年12月末までとなります。

すでに会員期間が過ぎてしまった皆様におかれましても、新たに賛助会員としてご支援いただきましたら大変有り難く存じます。手続きの方法は同じです。どうぞよろしくお願いいたします。

なお、更新を希望されない方につきましては、手続きはご不要です。またご支援いただける機会をお待ちしております。

賛助会員 更新手続き（年会費入金）の方法について

■下記の年会費をお振込みください。

ホームページ（www.japanmaetao.org）からクレジットカード決済も可能です。

「あなたとできること」→「賛助会員になる」の下「クレジットカードによるお申し込みはこちら」へお進みください。

<年会費> 一般会員： 3,650円/年
学生会員： 1,825円/年
法人会員： 36,500円/年

<振込先口座>

ゆうちょ銀行（銀行コード9900）

支店名：〇一八（ゼロイチハチ）

口座名義：NPO法人 メータオ・クリニック支援の会
（カタカナ） トクヒ メータオ クリニックシエンノカイ

口座番号：10140-8960841

*他行からのお振込みの場合 普通 0896084

※ 当会が入金の確認をもって手続き完了となります。メールにてお



■注意事項

・住所、氏名、メールアドレスに変更がある場合、振込名義がご本人でない場合は、事務局（support@japanmaetao.org）までご連絡ください。

※ 期限を過ぎてからご入会される場合は、ホームページより新規の方法でお手続きください。

メソトマンスリー





【メソト=齊藤 つばさ】

最近のメソット

あけましておめでとうございます。本年もどうぞよろしくお願い致します。

私はメソトでお正月を迎えましたが、12月31日の夜7時ごろから家の近くで花火が打ち上げられていて、にぎやかなカウントダウンでした。

さて、12月は世界エイズデー、シンシア先生の誕生日などイベントがたくさんありましたので、そちらを紹介させていただきます。

12月1日は世界エイズデーでした。



(イベントで使われていたポスター)

この日は、メータオクリニックでエイズの予防啓発を目的として、地域の人や学生・患者さん達へ向けたイベントが行われました。

内容としては、

- ① エイズに感染してしまった女性のお話
- ② スタッフによる劇（エイズの症状や、発症から診断・治療される過程）
- ③ エイズに関する問題が出題されるコーナー

全てミャンマー語で行われていたので、参加した方々はわかりやすかったのではないかと思います。

①の女性のお話は、近くにいたスタッフに訳してもらったので、みなさんにもお伝えしたいと思います。

「若い頃、村で働いていた女性ですが、賃金が安く生活が大変でした。ある日、もっとお金が稼げる仕事があるから、村を出て大きな都市へいこうと誘われました。それを信じてついて行ったところ、到着したところは聞いていた都市とは違う、どこかの農場(や畑)でした。

そして、その農場のオーナーに売られて(同意なしで)いろいろな人の相手をする事になり、その結果エイズに感染してしまった。その後村に帰ってきてそれから、メータオクリニックへ受診し、エイズと診断されました。今は薬を飲んで治療しています。

私のように、何もわからない状態で感染する人を減らしていきたい。また、どんなことで感染するのか?感染するとどんな症状が出るのか?ということをおみなさん今日のイベントで学んでください。」

と言っていたそうです。

本やテレビでは、そのような話を見たり聞いたりしたことはありますが、実際に目の前にいる



患者さんがそのような体験をしていたということに、私はすごく衝撃を受けました。

③はクイズ形式のため、学生たちが楽しみながらエイズについて学ぶことができ、授業で聞くよりも彼らの印象に残りやすいのではないかと思います。

12月6日はシンシア先生の誕生日でした。スタッフや学生が歌や踊りを披露していて、とても素晴らしい会でした。



(お誕生日ケーキ)

12月18日はカレンニューイヤーでした。このようなイベントの日は、モヒンガーがふるまわれます。ナマズとバナナの茎を煮込んだスープに、そうめんに似た麺が入っています。その上に豆の天ぷらや草をトッピングして食べます。味はとてもおいしいのですが、スープに入っている唐辛子が辛く、メソトへ来たときは辛すぎて食べられなかったです。現地の人たちはこれに追加で唐辛子をかけているので、すごいと感じます。



(モヒンガー)

12月27日に看護研修の2期生が修了しました。25名全員が研修を修了することが出来てよかったです。

6か月間の研修では基礎的な知識・実技のみの研修のため、まだまだ知識不足・経験不足な部分が見られます。研修生たちが、「研修が終わったから自分は完璧だ」と思わず、これから働きながらいろいろな患者と関わる中で、「患者の病気や症状について勉強したりアセスメントや実技の練習が必要だ」と自ら思ってくれたら嬉しいです。

今後は、6か月間で学びきれなかった部分と一緒に関わっていきたいと思います。



(修了式での集合写真)

ミャンマー人看護師のキンダーミンさんが12月で契約が終わり、ミャンマーへ帰国しました。私が8月に赴任した時から、ミャンマーの文化を教えてもらったり、スタッフが全然やりたがらない仕事を2人でスタッフを誘ったり、私とキンダーミンさんの意見が全然合わなくて1～2時間話し込んだりと毎日いろいろと関わりました。今、とても寂しい気持ちです。



(さよならパーティーをした時の写真：看護スタッフと共に)

きょうのゆめ

看護スタッフの1人が、メータオ・クリニックを辞めて村に帰ることになりました。なぜ辞める決意をしたかを話してくれました。

今まで、メータオ・クリニックのスタッフであればメソト市内の滞在とクリニックでの労働が認められていました。しかし、タイの法律が2017年6月に変わり、メータオ・クリニックのスタッフも他の移民労働者と同じようにワークパミッドがなければタイ国内で（メータオ・クリニックで）働くことが出来なくなりました。

また、クリニックへ大きな支援をしていた団体がミャンマー国内の支援に移行することになり、2018年からメータオ・クリニックの予算が少なくなることで、スタッフの給料が2017年10月から全員20%削減されています。たくさんのスタッフが、メータオで働き続けるか、タイ国内の工場や工事現場などで移民労働者として働くか（メータオのトレーニングの資格は医療職者として認められていないため、病院では働けません。）、ミャンマー国内に戻るかなどの将来について考えたと思います。



この看護スタッフは、27歳男性、看護スタッフ1期生で、内科で働いていました。

彼の村には日本でいう中学校くらいまでの学校しかなかったため、「もっと勉強したい」と思い、村を出て難民キャンプ内の学校へ通ったそうです。学校を卒業してから、メータオ・クリニックで働けることを知り、約5年間働いていました。看護研修を受けた理由は、「自分がステップアップできる機会だったから」ということで、仕事にも積極的に取り組み内科の看護スタッフのリーダーとして頼もしかったです。

村への帰国を決めた理由はいくつかあり、もっとも大きな理由はビザとワークパミッドの取得が困難ということでした。他にも、彼は兄弟の末っ子で、他の兄弟全員が家庭を持って両親の家から自立しているが、ご両親が高齢なため介護が必要になっていることなどを含めて今回のタイミングで帰国を決定したということです。

帰国後の予定ですが、メータオ・クリニックのトレーニングはクリニック独自のものなので、現在ミャンマー国内の病院で看護助手（その他医療職）の資格取得者として認められず働きません。国内で医薬品販売のための資格を勉強をしながら、両親の介護をしていくということでした。

看護スタッフとしていろいろこなせるようになってきたところでの退職となり、本人もやりたい仕事を継続できなくてとても悔しいのではないかと思います。ビザやワークパミッドなどの法律改定による影響は大きく、なりたい職業について働き、生活できるお金が得られるということの喜びを再度感じました。

国内から

年頭のご挨拶

【北海道＝田畑】

皆さま、平素よりメータオ・クリニックならびに JAM へのご支援を頂きありがとうございます。また、緊急支援のワンコインへのご寄付、賛助会員への継続支援を頂き、皆様の応援に背中を押される思いです。ありがとうございます。

2007年より始まりました JAM は現在、カンボジア・コートジボワール・ラオス・ベトナムなどへ赴任し JAM ボランティア活動を継続している事務局と日本で医療・保健・教育などの専門職として従事している事務局員の合計22名と第7期現地派遣員を迎え活動を継続しております。ケアの出来る看護スタッフの育成事業や Readyfor などのファンドレージングにも挑戦してまいりました。

この度、前川前事務局長より引き継ぎを受け、2018年より日本事務局長を勤めさせて頂くこととなりました、田畑彩生と申します。2007年に大阪の BRCJ 主催の夏のスタディーツアーでメータオ・クリニックを訪問し、2009年に前川前事務局長より JAM の活動をご紹介いただいたことをきっかけに JAM の日本事務局活動への参加を始めました。2012年より2年間皆様の応援を頂き第4期現地長期派遣員としてメソトへ赴任しております。マヒドン大学公衆衛生大学院を卒業後、現在は医療過疎の進む北海道の2次医療圏での地域保健活動に従事しながら、JAM の活動を続けております。

2018年は、タイ・ミャンマー国境の医療・保健団体にとって大きな挑戦の年となります。多くを欧米諸国の政府機関予算に頼り運営していたメータオ・クリニックは、予算削減により2018年現在も6割に近い予算の確保が難しい状態に直面しております。予算削減に伴い生活に困窮したクリニックスタッフの25%が退職の選択を考えているとの情報が昨今入りました。



しかし、このような中でもミャンマー/ビルマ国内からの患者は途絶えることがなく、妊産婦や出産を控えたお母さまや発熱・感染症を始めとする初期医療と教育を必要とするミャンマー/ビルマからの人々のタイ側での初めの受け皿として、今日も診療・教育を実施しております。また、中進国へと発展を遂げてまいりましたタイ王国も、大量に流入するミャンマー/ビルマからの労働移民への社会保障として国境での医療の提供を実施してまいりましたが、治療の長引く疾患、多額の治療費用がかかる疾患の継続的な受け入れには限界があり、長期リハビリが必要な症例、がんの末期、心不全を始めとする慢性的な疾患、難病患者さまの最期の受け入れ先としてメータオ・クリニックは必要とされております。また、ミャンマー・ビルマ国内の村々への患者さまの退院・帰還調整を実施する機関として、医療・看護や福祉サービスの提供を継続していくとの強い意志のもと診療を継続しております。これからも私たちと共にメータオ・クリニックへ訪れる大切な尊厳ある命を守るための活動にご参加下さいますようお願いをし、ご挨拶と代えさせていただきます。今後ともよろしくお願い致します。

国際保健医療協力のなかで (39)

【東京＝小林 潤】



年末オーストラリアを訪れてきた。アメリカと同様、それ以上であろうか。人種のるつぼであることが強く実感できた。移民のルーツをみせる博物館も実によくできていて、オーストラリア人であるとともに、移民のルーツを認識することについて問いかけをしている。一方、その裏でオーストラリア原住民への侵略の歴史であったことも認識できた。

オーストラリアの原住民であるアボリジニと類似した文化をもっている人々が生活するパプアニューギニアは1930年までは、自分の所属するコミュニティの人々とはほとんど接しない生活をしている人が大部分であった。交易の場以外では、同じパプアもしくはニューギニアで生活している民俗学的に同じ民族であっても積極的に接することは長い間なかったというのである。違うコミュニティに侵入することになれば、それは死を覚悟しなければならぬことであった。それを犯すことになれば、村同士の争いになり、実際多くの住民が争いで命をおとし、女性子供は戦利品の一つであった。実際、パプアニューギニアに派遣される日本人も異なったコミュニティに所属する人間であり同様なリスクがあった。これらのことから政府職員や青年海外協力隊等はこのリスクを認識し、男性しか派遣してこなかった。しかしながらこれは、人間の歴史のなかでは多くの時代に共通した生態であってパプアニューギニアに限った話ではないと人類学の多くの学者は言っている。日本においても邪馬台国が形成される以前は同様な分化であったかもしれない。これが交易が広がれば広がるほどにこの境はなくなってきたともいえる。

今、我々は当たり前のように、日本国内の他のコミュニティのなかを行き来しているし、他人の土地であっても野山であれば許される範囲であれば侵入をさせてもらっている。海岸や沿岸の海に関しては漁業権侵害などの一部の制限を犯さない限りは自由に出入りを許されている。さらに他国であってもパスポートをもってビザを取得すればその国の人々と同じように移動が許される場合のほうが多い。但し、これは当たり前のことでないことを、人類の歴史から認識することは重要だと思う。この自由な移動が許されている裏腹には、交易があり、それによって莫大な富がもたらされてきたからである。これが世界的になった、すなわちグローバリゼーションをもたらしたのはイギリスの東インド会社のアジア進出が皮切りであったというのは有名な話であろう。「人間は自由に移動できる権利がある」ということは後からついてきたもので、これは現在でも決してどこの世界でも保障されるような絶対的な哲学ではない。交易によってもたらされる富がもたらしている一面であることはあらためて認



Facebook	Japan Association for Mae Tao Clinic (JAM) で検索して下さい。 https://www.facebook.com/JapanAssociationforMaeTaoClinic/
Instagram	https://www.instagram.com/japan_association_maetaoclinic/
Twitter	https://twitter.com/japanmaetao

※掲載されている全ての内容、文章の無断転載を禁止します。

